

た。また工人田中某に命じ等身大の全身骨格模骨「各務木骨」を作製した。

さらに座右用の実物1/3大の小木骨をもう一体作り、弟子達に骨関節の解剖を熟知させ、按摩して骨折や脱臼の整復法を教えた。そして運動作用の理を推究し整骨術を実施し、器械を精製し施術に便宜を図り、揺動から患部を護るため副木や包帯などで固定を行い、また重傷例には自ら創薬した曼陀羅花と白蛇の二味からなる麻睡散で全身麻酔を施すなど、多くの創意工夫を重ねた。

### 5. 『整骨新書』出版と木骨の献上

文献は研究の成果を1804年に『整骨撥乱』（内題「接骨發揮」）としてまとめ、1810年にその草稿を加筆・修正し集大成して『整骨新書』を出版した。とりわけ巻首の「各骨真形図」は極めて精緻な骨の解剖図譜である。

数年来病床に伏していた文献の命を受け、弱冠9歳の門人中山樹（後に娘婿となる相吾・東風軒）は1819年春に「各務木骨」と文献の直筆草稿である『摸骨呈案』を携え江戸に往き、幕府に献上し

た。望みが叶い満足した文献は10月14日に65歳で没し夕陽丘浄春寺に葬られた。

### 6. まとめ

各務文献は生来の<sup>ひとをすくふ</sup>濟世の志と正義感から整骨医を志した。しかし陳腐な中国伝来の施術を妄信し経験に頼り施術を行い、またそれを秘伝とする整骨師に憤りを覚えた。そこで実証的科学精神から真骨収集し自ら解剖を行って骨関節機構を解明し、さらに等身大の全身模骨「各務木骨」を作製した。

努力家で器用な文献は親試実験を重ね新たな整骨術を開発し、座右に置いた小木骨で弟子達を指導した。その成果をまとめ『整骨新書』を刊行し、さらに最晩年には望みが叶い「各務木骨」を幕府医学館に献納した。

今日の整形外科医療の基礎を作り近代化に寄与した整骨医各務文献は、まさに我が国「近代整形外科の父」と称するに相応しい人物であると思われた。

（令和4年1月例会）

## 日本経済の父渋沢栄一の社会事業について

稲松 孝思

渋沢栄一（1840–1931）は日本資本主義の父と言われる経済人であるが、若年時より社会事業に関わっている。生前はお金持ちの道楽の慈善事業と見做されることが多かったが、土屋喬雄は彼の社会事業の重要性を指摘している。1970年頃の美濃部都政下で、一番ヶ瀬康子は養育院100年史を監修する課程で、渋沢の社会事業家としての貢献に気づいた。しかし、当時の福祉領域の学会では、資本家で、国家の手先の渋沢を持ち上げるのは怪しからんと言う反応だった。1999年、渋沢研究会20周年記念出版「公益の追求者渋沢栄一」で、長沼友兄、山名敦子、金澤貴之、平井雄一郎らが社会事業家としての渋沢像を描いている。2010年、大谷まことは渋沢を社会事業家として評価する大

著を出版している。私はこの頃から本学会で、養育院の成立について発表を始め、2020年に渋沢研究会30周年記念出版「はじめての渋沢栄一」で、福祉領域での活動について述べた。2019年杉山博昭は福祉領域での渋沢の貢献を、2021年武井優も養育院と渋沢の関係について出版している。この間、薩長史観に偏る明治維新や資本主義、新自由主義の見直し、GAF A批判、持続する開発目標重視などから、これまでの渋沢像の見直しが必要になっている。そのような中で渋沢は、NHK大河ドラマのヒーローや、1万円札の肖像に取り上げられ、その公益を重んじる行動が評価されるようになった。

「渋沢栄一伝記史料」全68巻に集められている

多数の福祉・医療関係の活動を、その時期ごとの特徴について検討した。明治5年に東京府知事・大久保一翁は、營繕会議所に救貧策を諮問し、三策の答申を得、共有金（江戸期の松平定信による七分積金）を利用して、市中の鰥寡孤独の人を収容する「養育院」を設立した。翌年には近代的教育病院である東京府病院を皇室の下賜金を原資に立ち上げて、相互関連する運営を試みている。明治7年に渋沢栄一は、静岡藩以来旧知の東京府知事・大久保一翁に共有金の運用を託され養育院の運営に関与した。明治9年には養育院事務長、12年からは養育院長として生涯にわたり深く関わり、代表的な社会事業となった。なお、養育院から派生した巢鴨分院→石神井学園、井の頭学校→萩山実務学校、養育院回春室→全生病院、養育院安房分院などのいずれにも渋沢は関わり続けている。

その後の明治20年代までに、福田会（明治12年設立の仏教系育児院。渋沢の畏友杉浦讓が関与）、博愛社（明治13年佐野常民が設立し、その後のジュネーブ条約加盟時にはA.シーボルトも関与）、同愛社（明治17年に高松凌雲が設立した無料診療施設）などを援助している。いずれも第3回パリ万国博参加時に渋沢と行を共にした人たちの関係する施設であり、その人間関係から関与に至ったものであろう。明治30年代以降渋沢は、当時の社会事業家の求めに応じて、岡山孤児院（明治32年、石井十次）、感化院関係（明治32年、家庭学校、留岡幸助）、救世軍（明治40年、山室軍平）などを支援している。養育院幹事（安達憲忠、田中太郎）らとの社会事業論議の中での共感に基づく支援であろう。東京慈恵会医大は明治14年に高木兼寛、松山棟庵らが、英語系医学教育を目指して設立した成医会講習所に端を発する。明治17年に東京府病院（明治14年に廃院）の払い下げを

受けて有志共立東京病院を開設した。明治40年に渋沢が東京慈恵会（有栖川恵子親王妃総裁、徳川家達会長）を設立したことで財政基盤が定まり、以後の発展につながった。「恩賜財団済生会」は明治44年の天皇の「済生勅語」に従い桂太郎総理主導で作られ、日露戦争後の生活困窮者に対し全国的に病院や診療所などを展開した。経済人として渋沢栄一が、医師として北里柴三郎が名を連ねる全国的な社会事業活動である。大正3年、米人牧師R.B.トイスラー（1933）が聖路加国際病院を設立したが、渋沢の援助が顕著で、それ以前から事業を行っている同じ聖公会系の滝野川学園、大阪聖バルバナ病院の援助も開始している。当時渋沢は、米国の日本人移民禁止の動きに対して対米民間外交を展開し、下田でのハリス顕彰、米国財界訪問団、青い目の人形運動、太平洋会議などを行っている。一連の対米民間外交と期を一にした、渋沢のトイスラー支援である。晩年の渋沢は、財界の重鎮として、東京府慈善協会、中央盲人福祉協会、全日本方面委員聯盟、日本結核予防協会、仏眼協会、癩予防協会などの要職を務めている。養育院における安達憲忠、田中太郎らとの社会事業の実践を、日本全体の社会事業の組織作り、財政支援に発展させていったものといえよう。こうした社会事業に尽くす渋沢の原動力は、母親譲りの慈悲心、公益を重んじる姿勢、合本主義、他人の意見をよく聞き、現実的に対応する行動パターン、西洋文明社会への憧れ、論語精神、大正デモクラシーの社会的風潮などがないまぜになってのことと思われる。また、養育院と取り組んだ理由に、七分積金制度を作った松平定信や、養育院設立への大久保一翁の思い、現場を預かる幹事の安達や田中などとの二人三脚の組織運営経験の影響が考えられる。

（令和4年3月例会）